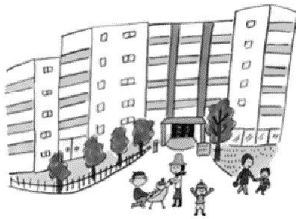


# 学校の実態把握のために

～生徒・保護者・教員を対象にした調査の実施～

## 1 きっかけ



### (1) 学校の立地

本校は、新しい街の中にある、まだ歴史の浅い学校です。

また、本校の学区は、大型マンション等の新興住宅が立ち並び、神社仏閣が一つも無い地域で、保護者同士の関係は、地域柄、希薄であるといえます。この地域は、親の教育に対する関心が高く、小学校から受験を経験する子どもが多いことが特徴のひとつです。

### (2) 学校の実態把握の必要性

前述のような立地条件上の事情から、保護者の学習内容や、授業時数、評価・評定への関心は大変高く、学校への質問・問い合わせが多く寄せられます。また、保護者の価値観の多様性の傾向がなかなか分かりにくい現状があります。

このような環境の学校で、いかにより良い学校づくりをしていけばよいのかを模索するために、学校社会を構成する保護者・生徒・教員の三者が、それぞれ学校の現状をどのようにとらえているか、その実態を把握することが必要だと考えるようになりました。

学校と地域が「連携」「協力」することは、地域の実態を学校が理解し、一方で学校の真意が地域に理解されることにつながると思います。“地域に根ざした教育”は、学校と地域の相互作用により教育力が向上していくと考えるからです。

そこで、“地域が学校に何を期待し、何を望んでいるか”の調査が必要になってきます。

実態調査は、これからの教育を行う上では重要な位置を占めると思います。さらに、得られた結果の分析を地域の保護者にフィードバックすることによって連携がより強固になり、そのことが生徒の教育環境の向上につながると思います。



### (3) 実態把握の方法

学校の現状把握を行う方法は、面接法を中心とする聞き取り調査、観察法を中心とするフィールドワーク、質問紙法による調査など様々なものがありますが、今回は、質問紙によるアンケート調査を実施することとしました。

これは、学校の現状について、保護者・生徒・教員の三者の大きみな見方を同じレベルで、同時に大量の意見を集約でき、比較がやりやすいと考えたからです。

## 2 実践のための準備

### 標準化された検査

市販されている検査は、標準化という手続きを経た上で市販に至っており、妥当性（測定しようとするものを的確に測定できること）や、信頼性（同じ条件での実施においては、同様の安定した検査結果が出ることを満たしています。

こうした検査には、個人を対象にしたものとして、知能検査（「WISC」など）や性格検査（「Y-G検査」や「内田クレペリン検査」など）、職業適性検査などがありますが、この他に、集団を対象として、その実態を測定するための検査（「Q-U」など）もあります。

### (1) 質問紙作成のための話し合いの実施

アンケート調査で学校の実態を把握しようと考えた時に、一番大変だったのは質問紙の作成でした。

もちろん市販されている既存の標準化された検査で生徒の実態を把握するという方法もありますが、今回は生徒だけでなく保護者・教員にも同種の検査を実施し三方向から学校の実態を把握しようとしたので、質問紙そのものも学校で作成することにしました。

アンケート作成にあたって、学校が直面している問題点を明らかにするため、アンケート実施に先立つ8ヶ月ほど前から、生徒指導主事、学年主任、進路指導主任、養護教諭を中心に何度も集まって、話し合いの機会を持ちました。

結果として、この会議自体が単に質問紙の作成というだけでなく、学校や生徒、保護者、地域あるいは教育そのものに対する先生方相互の意見交換の場となったのは、予期せぬ副産物でした。この会議がお互いを理解していくうえで、大きなきっかけになったように思います。

### (2) 質問内容の設定

上述のような話し合いをふまえて、「『学校満足度』に関する調査」と題して、その質問紙調査の内容を以下のようにまとめました。

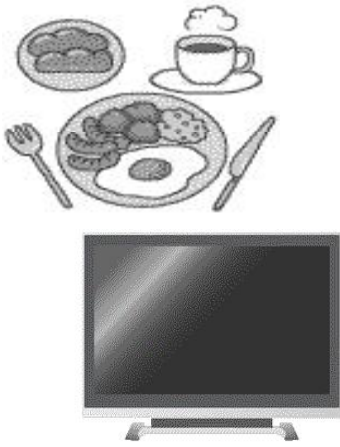
#### 0. 回答者自身についての設問

【生徒用・保護者用・教員用に共通の質問】

・性別、学年（保護者、教員の場合は年齢層）などの属性について

【生徒用・保護者用に共通の質問】

・学校でのボランティア活動への意欲、地域の催しに対する積極的な参加の有無、学校（保護者の場合は地域）での親しい友人の有無



#### 【その他】

・この他に、生徒用には、朝食摂取の有無、自宅学習時間、テレビ視聴時間などの生活についての質問を、保護者用には、現学区での在住期間、保護者会などへの出席状況などの質問を、教員用には保護者の要望や、本校で重点を置くべき教育などについての自由記述の質問を、それぞれ作成した。

1. 学校運営全般についての設問 [15項目（四段階での評価）]

2. 特別活動（学級活動、生徒会活動、学校行事等）についての設問  
[5項目（四段階での評価）]

3. 生活指導についての設問 [10項目（四段階での評価）]

4. 進路指導についての設問 [10項目（四段階での評価）]

5. 教科指導についての設問 [10項目（四段階での評価）]

6. 部活動についての設問 [10項目（四段階での評価）]

7. 「あなたの理想とする学校」についての設問

[11項目の質問（四段階での評価）、11項目から理想として重視する3項目の選択、自由記述]

#### 実態調査の実施・分析

調査結果の集約並びに分析・活用等に関しては、大学などの外部機関と連携して行うことができると、より有効に活用できます。

#### 四つの選択肢

このアンケート調査における選択式の設問は、四つの選択肢から一つを選ぶ形で、四段階での評価を求めています。このように、意図的に「どちらでもない」の選択肢を置かず、四者択一で回答を求める方法を四件法といい、はっきりと、どちらかの傾向を知りたい場合に用いられます。

この調査は千葉大学教育学部教授・明石要一先生のご協力を得て実施と分析を行いました。この質問内容設定の段階から、明石先生からご指導をいただくことができました。

生徒・保護者・教員の三者の回答の違いを分析することを想定して、1～7の設問については、生徒用・保護者用・教員用であえて共通の項目を設定しました。

また、自由記述以外の選択式の設問では、それぞれの項目で「そう思う、少し思う、あまり思わない、思わない」の四段階での評価を求め、四つの選択肢から一つを選ぶ形式としました。

#### （3）アンケート実施計画の策定

約1年をかけて準備をしてきたため、実施は年度末に近い1月となってしまいました。

はじめは、一つの学年内での実施を考えていましたが、管理職からの指導により、全校に対するアンケート調査として実施することにしました。

そこで、学校評価を兼ねて、次年度の教育計画を立てるための資料としても活用することとしました。

### 3 とりくみ



#### (1) アンケートの実施

##### 【実施時期】

平成22年1月

##### 【実施方法】

生徒対象の調査は、全校生徒（446人）を対象として、全校で時間を定め、各教室において実施しました。

保護者対象の調査は、生徒を通じて各家庭（家庭数428）に対して用紙の配布と回収を行いました。ただし回収は、回答を希望する保護者からのみとしました。

教員対象の調査は、職員会議で全教員（28人）に用紙を配布し、回答の協力を求めました。

（回収率は、生徒が94.8%、保護者が75.9%、教員が85.7%でした。）

##### 【集計結果と分析結果の報告】

平成22年3月の卒業式前に、集計結果と分析結果をプリントにまとめ、学校だよりとして、生徒を通じて保護者に配布しました。

#### (2) アンケートの結果

アンケートの結果として、保護者と生徒にフィードバックしたのは、以下のような内容でした。

##### ① アンケートから見た生徒の姿

- ・兄弟や姉妹が有る者は80%を超えている。
- ・毎日の朝食に関しては、95%以上が「食べている」と回答している。
- ・一日の平均学習時間は、1～2時間が一番多く、約半分を占めている。
- ・テレビ視聴の一日平均時間は、1～2時間程度が60%、1時間以内が20%程度である。
- ・ボランティア活動の参加については、「1年に1～2回程度なら、やってみよう」という回答が40%程度で、積極的な回答は10%程度であった。
- ・地域の催しへの積極的参加率は高く、3/4程度が参加している。
- ・親しい友人が「校内に複数いる」との回答は95%を超えている。

##### ② アンケートから見た保護者の姿

- ・回答者は母親（女性）が圧倒的に多く、96%あまりを占めている。





- ・回答者の年齢層は41～50歳が75%を占め、それ以外は30代が大部分を占めている。
- ・学区内に5年以上在住している家庭が84%を占めている。
- ・学校公開や保護者会などの出席については、「ほぼ毎回出席する」及び「半分程度出席する」を含めると85%となり、学校教育への関心は大変高いと言える。
- ・本校へのボランティア等による支援については、「自分から手をあげて、やってみたい」「学校から頼まれたら、やってみたい」などの積極的な意向は、19%という低い結果となった。
- ・地域の催しへの参加については、7割が「いいえ」を選択している。

### ③ 理想とする学校

（「あなたの理想とする学校」の設問に対する、生徒、保護者、教員のそれぞれで多かった回答）

「あなたの理想とする学校は」に対する回答の割合			
(11項目から3項目を選択して回答)			
	一番目に多かった回答	二番目に多かった回答	三番目に多かった回答
生徒	明るく楽しい雰囲気のある学校 74.2%	いじめや言葉の暴力のない学校 52.5%	行事でみんなが一つになって取り組める学校 40.0%
保護者	生徒と先生が信頼関係でつながっている学校 65.2%	授業中、落ち着いて学習できる学校 46.2%	いじめや言葉の暴力のない学校 44.6%
教員	みんなが自主的にルールを守って生活する学校 50.0%	いじめや言葉の暴力のない学校 45.8%	生徒と先生が信頼関係でつながっている学校 33.3%

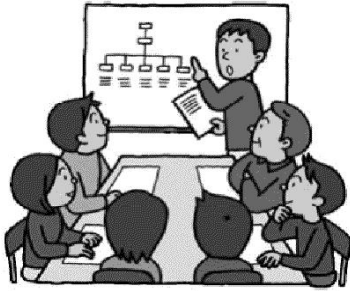
### (3) アンケート結果の分析

アンケート結果から、特に「理想とする学校」に関する三者の回答に着目して、以下のような分析を試み、これも学校だよりを通じて保護者と生徒にフィードバックしました。

- ① 『いじめや言葉の暴力で悩んでる人がいない学校』を生徒・保護者・教員ともに理想としていること

「いじめや言葉の暴力で悩んでいる人がいない学校」の項目を、生徒（52.5%）・保護者（44.6%）・教員（45.8%）の三者とも重視している結果となりました。

これに関連して、「生活指導についての設問」の中で、い



じめやいやがらせについての三者の回答は以下の通りでした。

「本校は いやがらせ や いじめ が殆どない」に対して		
	「そう思う」+「少し思う」	「あまり思わない」+「思わない」
生徒	46.2%	53.8%
保護者	33.4%	66.6%
教員	0.0%	100.0%
「本校は いじめ に対して積極的に指導している」に対して		
	「そう思う」+「少し思う」	「あまり思わない」+「思わない」
生徒	37.3%	62.7%
保護者	39.6%	60.4%
教員	45.8%	54.2%

このことから、三者とも、「いじめやいやがらせがない」と思わない割合の方が、「そう思っている」割合より多い。また、いじめに対する指導を生徒や保護者はあまり積極的な指導とは受け止めていない、ということが浮き彫りになりました。

いじめや言葉の暴力で悩んでいる人がいない学校の実現を目指して、そのような学校づくりに重点をおいて、いっそう手厚い指導を学校として心がけてゆくことを、学校だよりの形で、生徒を通じて保護者に伝えました。

## ② 有意義な学校行事をさらに発展させていくこと

生徒が理想とする学校で、三番目に多い回答が、『行事でみんなが一つになって取り組める学校』でした。

これに関連して、「特別活動についての設問」の中で、「学校行事（校外学習・林間学校・修学旅行・体育祭・合唱コンクール・高校訪問・職場体験等）は生徒のための有意義で大切な活動かどうか」の質問についての三者の回答は以下の通りでした。

「学校行事は有意義でとても大切な活動である」に対して		
	「そう思う」+「少し思う」	「あまり思わない」+「思わない」
生徒	95.2%	4.8%
保護者	92.5%	7.5%
教員	70.8%	29.2%

このように、生徒・保護者・教員の三者とも高い評価となりました。自由記述からは、特に合唱コンクールや体育祭への評価が高く、激励や感謝の言葉が沢山ありました。



今後も「学校行事」に力を注いでいくことを、学校だよりの形で、生徒を通じて保護者に伝えました。

③ 授業の充実を通じて生徒と教師の信頼関係を深めること  
「理想とする学校」について、保護者と教員が共通して重視した項目の一つに『生徒と先生の信頼関係でつながっている学校』があります。割合から見ると、保護者については1番目(65.2%)に重要視しており、教員については3番目(33.3%)に重要視しています。

また、保護者が2番目に重要視している理想の学校は、『授業中落ち着いて学習できる学校』(46.2%)となっています。学校の機能や役割から考えたとき、授業中落ち着いて学習できる環境は非常に大切といえます。

これに関連して、「教科指導についての設問」の中で、「授業へ」や「成績」についての三者の回答は以下の通りでした。

「本校生徒は授業への興味・関心を高く持っている」に対して		
	「そう思う」＋「少し思う」	「あまり思わない」＋「思わない」
生徒	65.9%	34.1%
保護者	56.4%	43.6%
教員	70.8%	29.2%
「本校の保護者は授業への興味・関心を高く持っている」に対して		
	「そう思う」＋「少し思う」	「あまり思わない」＋「思わない」
生徒	64.7%	35.3%
保護者	79.6%	20.4%
教員	79.2%	20.8%
「本校生徒は成績向上に向けて努力を惜しまない」に対して		
	「そう思う」＋「少し思う」	「あまり思わない」＋「思わない」
生徒	70.4%	29.6%
保護者	71.6%	28.4%
教員	79.2%	20.8%

アンケート結果から「授業」や「成績」に関しては、三者とも「あまり思わない」と「思わない」よりも、「そう思う」と「少し思う」を多く選択している結果となりました。

「授業」や「成績」に対する関心が高いことは、大変望ましいことでもあり、生徒や保護者との信頼関係構築のためにも、『授業中落ち着いて学習できる学校』づくりを大切に考えて取り組んでいくことを、学校だよりの形で、生徒を通じて保護者に伝えました。

## 4 見えてきたこと



### 学校におけるピア・サポート

ピアとは同質性の高さから形成される仲間意識のことです。つまり、ピア・サポートとは、同じような境遇にある仲間として互いに支え合う活動を行うということです。

通常、学校におけるピア・サポートには3つの領域があります。①「児童生徒相互のピア・サポート」(年齢や同じ学校生活環境の中で過ごしているという意味での同質性の高さ)、②「保護者相互のピア・サポート」(同年代の子どもを持ち、同じ学校に通わせているというところからくる同質性の高さ)、③「教員相互のピア・サポート」(教員として同じ職場環境の学校で働いているというところからくる同質性の高さ)の3つです。

それぞれ児童生徒間、保護者間、教員間でピアとしての感覚を育てていくことは学校社会を豊かで実り多きものとすることに有益です。

学校の実態を把握するためのアンケート調査の結果やその分析に基づいて、どのような対応策を考えていくかということは、学校として取り組んでいく今後の課題となりますが、ここでは、アンケート調査という実践そのものの中から見えてきたいくつかのことについて以下に述べます。

#### (1) 意見交換の場を形成できたこと

質問紙を作成するために先生方が何度も会議を重ねることが、副次的に教師相互の理解を促進するという働きがありました。意図したことはありませんでしたが、教師相互のピア・サポートともいえる場が形成されたようでした。

質問項目を作成する会議を進めるごとに、それぞれの教員の教育観や経験知が見えるようになってきました。今までは面と向かってそのような考え方の違いについて討論をする場はなかったのですが、質問項目を作成するという表看板があるせいか、比較的自由に自分の考え方を表出し、他者との考え方の違いについても率直な意見交換ができました。同時に、自分の困っていることなども、素直にその場に出されることが多くなり、それに対してアドバイスもなされるなど教員同士の良い関係が形成されていくのがはっきりと分かりました。

#### (2) 保護者との距離が縮まるきっかけになったこと

この調査アンケート実施の後に、保護者会やPTA懇談会などの場で、保護者から寄せられた意見を聞き取ったところ、以下のような声が聞かれました。

- ・アンケート結果を見て、もっと学校に協力しなければ、と思った。
- ・子どもと親の考え方の違いが見えてよかった。子どもの言うことを鵜呑みにして学校への対応を求めたりしないように気をつけたい。
- ・先生方の苦勞が、結果の用紙を通じて見えてきた。
- ・地域や学校の活動にもっと目を向けなければいけないと反省している。
- ・先生側と保護者側の考え方やとらえ方の違いが見えた。お互いに理解しようとする姿勢が大切だと思った。
- ・学校に伝えたいことを伝えることができて満足した。

ここにあげた意見の他にも、このアンケートを実施したこと





### 見通しを立てて教育実践に臨むための事前調査

「生徒や保護者が学校をどのようにとらえ、何を期待しているのか」、また「地域の保護者の考え方にはどのような傾向があるのか」などの点については、教員として日常的に生徒や保護者の言動にふれる中で、ある程度はつかむことができると思います。

これは、広い意味で観察法による調査のひとつであるとも言えます。しかしながら、十分な経験と訓練を積んでいないと、主観的な観察から普遍性をもった信頼できる結論を導くことはなかなかできません。

したがって、アセスメント(判断のための情報収集)の精度を高めるためには、観察法や面接法などによる調査に加えて、質問紙法による調査などを用いて、客観性の観点から補完することも必要になります。



は良かったとする肯定的な声が多くありました。

これらを通して、アンケートの実施によって保護者の学校教育に対するプラス意識の向上が見られたと感じました。このように保護者との距離が縮まったことは、地域に根ざした学校づくりをめざす上においても、大きな収穫でした。

### (3) 見通しを立てた上での教育実践が必要であること

今回の実態調査アンケートの取り組みを通じて、何よりも痛感したのは、「新しい教育実践、とりわけ保護者や地域との連携を必要とするような、地域に根ざした学校教育の取り組みを実施する際には、十分な事前調査が必要である」ということでした。

本校では、この調査実施の前に、全校と保護者、地域を巻き込んだ「あいさつ運動」の展開を試みたことがありました。観察から見出されていた生徒の現状に対して、とにかく何か対応策を実施したいということで実施したものでした。

それは、通常の「あいさつ運動」とは違って、「良きモデルを見せる」ということと「大量の良質なコミュニケーションのシャワーを浴びせ続ける」という2点だけを目的に実施したものでした。

朝の通学時に通学路沿いの地域の方々や生徒の保護者に協力してもらい、学校の内外で「おはようございます」という言葉のシャワーを浴びせ続けるのですが、ポイントの一つは生徒側からの返事は求めないということでした。生徒から「おはようございます」が返ってこようと来まいとそれは関係なく、ひたすら、こちら側からモデルとしての言葉のシャワーを浴びせ続けるのです。こうした実践で生徒に変化を生じさせるためには、少なくとも数ヶ月から1年くらいの長期にわたる実践が必要になりますが、結果的には、これが上手くいきませんでした。

今思えば、理由は二つありました。一つはこの実践の意味や目的が考え方の違う人に十分に理解され共有されていなかったということです。これは今回の実践で見出されたような意見交換の場があれば防げたことだと考えられました。もう一つは保護者の参加があまり得られなかったということです。保護者の地域参加の少なさは、今回のアンケート結果にも出ているとおりなので、事前にこのような調査が行われていれば、もう少し違う形の実践が工夫できたと考えられます。

どのような教育実践においても、周到な事前調査が不可欠であり、これがあってはじめて効果的な教育が可能になるのだということがよく分かりました。